

季節はすすむ・・・

立春の昨日、節分のおととい、(そしてスクーリングがはじまった) 2月1日、プロ野球のチャンピオン、今年は今週末からのイタリア五輪、3月には大相撲春場所、選抜高校野球で月末にプロ野球開幕、と駆け足で日めくりカレンダーが消費されていく感覚。

ときに季語ということば、俳諧や和歌、日本古来の文芸の様式であるが、ことばが季節をドライブしてくるといふか、引き寄せてくるという感覚は確かにある。日本人独特のものなのだろうか。すくなくとも四季のある国に生まれ育つとその素地は形成されていると推量できましようか。

そこで、ことばの持つ力。現実生成能力といふか、現実変成能力というものについて考えてみたい。この前のブログで、われわれソーシャルワーカー専門家が使用することばが特殊であり、自然に脳内でわきでたものではなく、ほぼすべてがテキストからの受け売り(意地悪く言えば、輸入業者)であるとのスヌメを展開した。上書きする意味で、まだ擦っているのかとお叱りをうけそうだが、ことばは見る景色を変えるということについてふれてみたい。

冒頭に記したイベントのシンボルであることばだけでも、気温が上がり、なぜか体が軽くなるような。同じ気温8度の今日、2月上旬の外気であっても、そういうものである。だから何だと気色ばむのは、やぼというもので・・・

新春の三元日、箱根駅伝をテレビで観戦しているころには、手先が冷え、足元にはルーズソックスをまき、というような防寒が必要な気温だが、それでも日中は8度だった記憶がある。同じ

8度なのだが景色がかわっているような気がする。(妄想だといわれればそれまでだが)

だが、確実に季節はすすんでいる。

春のことばたちが、その到来を実感させる。

また他の画面。利用者と言ってしまうと、個人である田中さんなり鈴木さんなりが、施設利用者という顔になってしまうという感覚をもったことはないだろうか？いや、サービス利用者なのだから、間違いではないのだが、お客様、という感じに接遇してしまったり、その一方、そうした人に見えてきてしまう。田中さんではなくなるという感覚。

デイサービスの職員としてかかわった経験から、とある方を今もわすれられない。中学校の校長先生をなされていたその紳士は、わがデイサービスの利用者として出会った。ゆえに、フェースシートでは理解した、その方は一も二もなく、「利用者ではなく校長先生」でいこうと思った。

わたしはよびかける、
ー校長、職員会議です。(つねにある、なにかの利用拒否には、そうした)

ーならば会議はどこであるのかな？(わたしをむいて)先生、とその紳士は応える。

他の職員では難渋するその方の誘導が、なぜかわが呼びかけだと、なにごともない。というまた、あるとき。

ー先生、次の会議の資料はこちらです。

そう言って手を差し伸べると、彼は「ああ、すまないね」と、かつて教壇に立っていた頃の、あるいは朝礼台から全校生徒を見渡していた頃の、凜とした、しかし柔和な表情を浮かべてスッ

と車椅子から立ち上がるのだ・・・

そこにあるのは、介護保険制度という冷徹なシステムが規定する「利用者」と「職員」の姿ではない。昭和の、ある地方都市の学び舎にあったはずの、校長と若手教諭のダイナミズムである。もちろん、これが一種の「ロールプレイ」であることは否定しない。認知症という病がもたらす周辺症状に対し、彼の見ている世界にこちらが「同期」しているに過ぎないという見方もできよう。しかし、私は思うのだ。そこで私が発した「校長先生」という言葉は、単なる記号やテクニックを超えて、彼の中に眠っていた「矜持」という名の現実を、その瞬間に再構築（リビルド）したのではないか。

冒頭で触れた「立春」や「箱根駅伝」の話に戻れば、それも同じことだ。摂氏8度の外気に「春」を感じるのは、私たちが「立春」という言葉を脳内にインポートし、それをフィルターとして世界を眺めているからに他ならない。言葉がなければ、摂氏8度はただの物理的な熱量指針でしかない。しかし、「立春」という言葉が介入した途端、風の匂いが変わり、沈丁花の蕾の膨らみに目が留まる。これは一種の「魔法」であり、言葉によって景色が変わって見えることにほかならない。

ソーシャルワーカーが使う専門用語も、本来はそうした「魔法」であるべきはずだった。「ストレングス」「エンパワメント」「セルフヘルプ」。かつて海を越えてやってきたこれらの言葉たちは、困窮や病に打ちひしがれた人々の背後に、まだ見ぬ可能性の景色を立ち上がらせるための

「光の言葉」だったはずだ。しかし、どうだろう。今の現場でそれらは、単なるアセスメントシート
の空欄を埋めるための、あるいは監査を無難に通り抜けるための、無機質な「輸入資材」に
成り下がってはいないだろうか。

「利用者」という言葉の罪深さについて、もう少し掘り下げてみたい。私たちは便宜上、施設
やサービスのクライアントである、その人を「利用者」と呼ぶ。だが、その言葉を口にするた
び、私たちは無意識のうちに、その人の人生の厚みを、制度という薄っぺらな封筒の中に押し込
めてしまっていないだろうか。田中さんは、かつて誰かの父であり、凄腕の旋盤職人であり、
早朝の釣りを楽しみにしていた男であったはずだ。鈴木さんは、地域で評判の料理上手であり、
三人の子を育て上げた母であり、夜ごと詩を綴る文学少女でもあったはずだ。それらの豊かな
「個」の風景が、「利用者」という均一化された言葉によって塗りつぶされていく。雪解けの泥水
が、芽吹き始めた若草を覆い隠してしまうように。

私がデイサービスの現場で、あの校長先生に対して「会議です」と言い続けたのは、彼を制度
の檻から救い出したかったからかもしれない。彼を「利用者」として接することは、彼から過去
を奪い、現在という名の狭い箱に閉じ込めることに等しいと感じたのだ。「校長先生」と呼ぶこ
とで、彼の背筋が伸びる。その瞬間、施設の食堂は職員会議の場へと変容し、彼は責任ある立場
へと回帰する。その「ファンタジー」のなかで、彼は紛れもなく彼自身であり、尊厳を保ってい
たのだ。

だが、ふと立ち止まって考える。私のこの「言葉」は、彼を癒しているのだろうか。それとも、去りゆく記憶の残照に、おりにやり新しい薪をくべているだけなのだろうか。ソーシャルワーカーという「輸入業者」として、私は彼の現実に寄り添っているつもりでいて、実は私自身の「こうあってほしい」という理想を、言葉という衣を着せて彼に押し付けているだけではないか。そんな内省が、春の淡い光の中に影を落としてもいる……

三月になれば、彼はまた窓の外を眺めて「卒業式の準備をせねば」と呟くだろうか。学校という場所において、卒業式はもっとも美しく、そしてもっとも寂しい別れの儀式だ。送り出す側の「校長先生」にとって、それは毎年のことながら、身を切られるような季節だったに違いない。そして、その儀式が終われば、学校はしばしの静寂に包まれる。

私は、彼の「卒業式」をまだ見たくはないのだと思う。言葉によって現実を変成させ、彼をこの場所に、この役割に留めておきたいと願うのは、支援者としての傲慢さかもしれない。それでも、私はこの「魔法」を解くことができない。

日めくりカレンダーが、また一枚、また一枚と剥がれていく。卒業式の喧騒が過ぎ去り、誰もいなくなった校庭に、ただ静かに春の陽光が降り注ぐ時間。その静寂を越えて、また新しい命が門をくぐる入学式の朝まで。桜の蕾が、その硬い殻を脱ぎ捨てて、淡いピンク色の花びらを空に広げるその時まで。

「先生、新入生の名簿が届きました」 いつか私がそう告げるとき、彼の目に、本物の春が映っていることを願わずにはられない。卒業式を無事に終え、桜が咲き誇る入学式まで。どうか、それまでお達者でいてほしいとも願う。

言葉という杖を頼りに、私たちはあともう少しだけ、この美しい春の入り口を共に歩いてゆきたいというのは贅沢というものであろうか

追記 この記事を書くにあたって、今回の SC 受講者のおひとりおひとりに深謝いたします。とりわけ、元校長先生である藍(仮名)さんには知的な刺激を頂戴し、感謝しきれません。もちろん、この文は、数年前に伊勢湾の漁港近くにある施設で出会った、ある校長先生へのオマージュであることは言うまでもありません。